

112 「フラメンコ」

『フラメンコ』というとな何を思い浮かべるだろうか？

激しい踊り？ スペイン？ ジプシー？ 独特の節回しの唄？

音楽や芸能に興味の薄い人にとっては、具体的なイメージが湧かないかも知れない。

父が音楽（歌謡曲）好きだったことから、子供の頃から音楽の環境に恵まれていた。父はプロのマンドリン楽団に所属していたことがあり、家にはマンドリンやギターがあった。

中学のころクラシック音楽に興味を持ち、多くの曲を聴いた。高校に進むと、同級生にギターの上手の人がいて、彼のように弾きたくてギターの練習を始めた。幸いギターは家にあり入りやすかった。

当時、ギターを習うには小原安正のソノシート付教則本が一般的で、それで練習した。始めの頃はなかなか左指が開かず苦勞したが、コツをつかみ少しずつできるようになった。

途中で挫折せず、クラシックギターの曲がある程度弾けるようになったのは、父の血を受け継いでいたからかも知れない。

社会人になり、音楽の興味はクラシックから少しずつ変化、ジャズやブラジル音楽、フォルクローレなどをよく聴いた。勿論ポピュラー音楽も好きだ。ジャズは幅が広く、好んで聴いたのはモダンジャズで、即興演奏や不協和音に興味を持ち、音階や和音など音楽の基礎的な理論の勉強もした。

このころ夢中で読んだのが『日本伝統音楽の研究』の著者、小泉文夫の一連の本である。小泉文夫については『36 小泉文夫のこと』で取り上げた。

そんな中、不思議な音階を基本とする「フラメンコ」に興味を持った。フラメンコについては、当時愛読していた雑誌「中南米音楽」にも取り上げられていたが、特に好きというわけではなかった。むしろ、“変な音楽”と置いていたくらいだ。ところが、いろいろな民族音楽を聴き、音階や和音の知識とともに聴いていくと、徐々にその不思議な魅力に惹きつけられた。

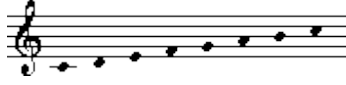
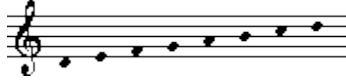





そんな時、日本におけるフラメンコ研究の第一人者 浜田滋郎氏の著書「フラメンコの歴史」が発刊され、熱心に読み知識が深まりフラメンコにのめり込んでいった。

スペイン南部アンダルシア地方には、紀元前からフェニキア人、ギリシア人、ローマ人、ゲルマン人（西ゴート族）、アラビア人、ユダヤ人、そしてジプシーなど様々な民族が入り込み、独自の文化が形成されていった。フラメンコはそれら文化のエッセンスを取り込み、長い時間をかけ醸成されてきたものだ。フラメンコは、唄（カンテ）、踊り（バイレ）、ギター（トウケ）の三位一体の民族音楽で、華やかな踊りに目を奪われがちだが、その中心はカンテである。初めは手拍子やタイコで唄っていたところに、踊りが加わり、アンダルシア民衆になじみの深かったギターの伴奏が付いた。

ただ、この三つはそれぞれ独り立ちもできる。伴奏のないたった一人の唄、あるいは唄も伴奏もない踊りだけ、またギター一挺のソロ演奏だけでも深い味わいがある。

クラシックギターをやっていた私が、最初に惹きつけられたのはフラメンコギターである。その奏法は独特で、音を聴いただけではどのように弾いているのか分からないところがある。弦楽器であるギターを打楽器としても使い、多彩なテクニックを駆使する。

フラメンコの基本音階は「ミ音」から始まる音階「フリギアモード」、教会の聖歌で用いられる音階（教会施法）の1つである。教会施法とは、

「ド」から始まるイオニアモード	(ドレミファソラシド)	
「レ」から始まるドリアモード	(レミファソラシドレ)	
「ミ」から始まるフリギアモード	(ミファソラシドレミ)	
「ファ」から始まるリディアモード	(ファソラシドレミファ)	
「ソ」から始まるミクソリディアモード	(ソラシドレミファソ)	
「ラ」から始まるエオリアモード	(ラシドレミファソラ)	
「シ」から始まるロクリアモード	(シドレミファソラシ)	

一般になじみの深い、西洋音楽の長音階（ドレミファソラシド）がイオニアモード、短音階（ラシドレミファソラ）がエオリアモードに該当する。

「ド」から始まるイオニアモード（ハ調の調音階）は第3音（ミ）、第4音（ファ）及び第7音（シ）、第8音（ド）の間が半音なのに対し、「ミ」から始まるフリギアモード【以下“ミの施法”という】では、「ミとファ」「シとド」の間の半音は変わらないので、第1音、第2音及び第5音、第6音の間が半音となり、音階の感じは大きく異なる。

音楽の旋律（メロディー）は一般的に“基音”（音階の始めの音）で終止するが、それがミの施法では「ファ→ミ」という特徴的な形となり、終始フワフワしたような独特の甘美な旋律が生み出される。

フラメンコのもう1つの特徴は“リズム”である。単にリズムというより、リズムに感情や由来などを織り込んだもので、それを“形式”と呼んでいる。ここで代表的な形式を紹介したい。

言葉の説明だけでは分かりにくいので、ユーチューブのURLからリンクで曲を聴けるようにした。聴きながら感じを掴んでもらえたら嬉しい。

初めてフラメンコを聴くと、感情をさらけ出して歌う姿、しわがれ声やかすれ声、叫び声に似た発声など必ずしも美しくない声に驚くかもしれない。体裁など全く関係なく、生の真剣な芸をぶつけて来る。

フラメンコの神髄は唄（カンテ）にあるといっても、日本人にとって親しみやすいメロディーではないし、声がいいわけでもない。そうなると、歌詞の意味を知りたくなる。しかし、スペイン語が分からなければ意味は解らない、という人が多いだろう。では、英語を勉強すれば英文の詩の意味が解るだろうか？詩の意味の深いところは、ネイティブでなければ解らないのではないだろうか？詞はさまざまな故事と結びついていることもあり、字面だけでは真意を捉えることは難しい。

日本人なら演歌を聴けば、歌詞からいろいろなことが伝わってくる。ところが、詩の意味が良く解らなくても、多くの外国語の歌が日本で受け入れられている。それは、メロディーだったり歌声だっ

たりハーモニーだったり、時には詩の内容だったり、さまざまな要素が複合して伝わってくるものがあるからだろう。詞の意味が解らないからといって、それが大きな問題ということにはならない。

フラメンコの歌詞は、主に「ヒターノ（ジプシー）の人生における、喜び悲しみなど様々な感情」「アンダルシアの歴史や風習に関すること」で、その他さまざまな事柄や感情であることは多くの歌に共通である。どんな歌詞で唄うかは、歌い手に任されているのもフラメンコの特徴の一つ。

詩の意味だけが大切というわけではなく、どんな気持ちで歌っているかということも同じくらい重要、それは全体から伝わってくる。それを感じて受け止める、音楽的な理解が非常に大切といえる。

実際に演奏されるリズムが以下に示した楽譜通りでなく、分かりにくいかもしれない。それでも、落ち着いて聞いていくと、きちんと特徴あるリズムが刻まれていることが分かるだろう。リズムを知るためだけなら、古い演奏の方が分かりやすいが、音質の問題などから比較的新しい曲を選んだ。

その結果、和音や旋律が現代的で捉えにくいかも知れないが、リズムを感じながら聴いてもらえば有り難い。形式名は一般に“複数形”で表されるが、例えば「^{ソレアレス}Soleares」を「^{ソレア}Solea」と、言いやすいように“単数形”とすることも多い。

(1) ソレアレス Soleares (ミの施法)

フラメンコの“母”といわれ、いわゆるフラメンコといえばこの形式が代表する。ソレアともいう。人生のあらゆる感情を内包し荘厳な美しさがある。複合リズムで、3拍子×2 + 2拍子×3の12拍子であり、アクセントは 1 2 ③ 4 5 ⑥ 7 ⑧ 9 ⑩ 11 ⑫ である。

Soleá ^{アルカンヘル} Arcángel
Soleá ^{リナ オレジャーナ} Rina Orellana (バイレ)

ソレアレスに似ているが、① 2 3 ④ 5 6 ⑦ 8 ⑨ 10 ⑪ 12 にアクセントがあり、ミの施法で演奏されるペテネーラス (Peteneras) や、長調で演奏されるキューバ由来のグアヒーラス (Guajiras) という形式もある。

^{ダニエル カサレス} Guajiras Daniel Casares (ギター曲)

(2) シギリージャス Siguirillas (ミの施法)

ソレアとともにその骨格をなす形式。ソレアより深刻で、追い詰められた極限の苦しみや悲しみを表す。ヒターノの逃げ場のない苦しみ、悲しみを表現した曲が多い。

複合リズムで、2拍子×2 + 3拍子×2 + 2拍子×1の12拍子である。

アクセントは① 2 ③ 4 ⑤ 6 7 ⑧ 9 10 ⑪ 12 であり、ソレアを基準にすると、ソレアの8拍目から始まるリズム。出だしのティリティリティリが特徴的。

Siguirillas アリシア アクーニャ
Alicia Acuña

(3) アレグリアス Alegrias (西洋音階)

ミの施法でなくハ長調やイ長調で演奏される明るい曲調。リズムは複合リズムでアクセントはソレアレスと同じであるが、テンポはソレアレスより少し速い。聴けばすぐ“アレグリアス”とわかる。

Alegrias ランカピノ チーコ
Rancapino Chico

(4) ブレリアス Bulerias (ミの施法)

何曲か聴くうちに体にしみこんで来る、フラメンコらしい激しいリズムの曲。複合リズムで、アクセントはソレアレスと同じだが、それをずっと速くし、さらにシンコペーションを多用する。はつらつとし生命力に満ちた曲調で「フラメンコの華」ともいわれる。

Bulerias カマロン デ ラ イスラ
Camarón de la Isla
Bulerias ニーニャ パストーリ
Niña Pastori

(5) タンゴス Tangos (ミの施法)

2拍子の強いアクセントに特徴があり、リズムカルな中にも重みを感じさせる。

アルゼンチンタンゴとは、由来もリズムも全く異なる。強くヒターノ色を感じさせる曲調。



Tangos エストレージャ モレンテ
Estrella Morente
Tangos エンリケ モレンテ
Enrique Morente

アクセントの位置が異なるタンギーリョという形式もあり、靴のステップの音を響かせる“サパテアード”（「サパート」は靴の意）はタンギーリョの代表である。



Tanguillo ホセ アントニオ ロドリゲス (ギター曲)
Jose Antonio Rodriguez

手拍子（パルマ）でタンギーリョのリズムがはっきりとわかる。

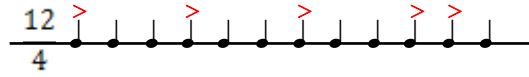
(6) ルンバ Rumba (ミの施法)

キューバ発祥のルンバとは異なる。非常に軽快なリズムでノリの良い曲、4拍子の歌なら何でもルンバにできる。ルンバはフラメンコからポップスの仲間入りをし、ルンバだけを歌うグループも数多く誕生している。

Rumba ミゲル カンページョ
Miguel Campello
Rumba デカイ
Decai

(7) ファンダンゴス Fandangos (ミの施法)

もとはアンダルシア地方の民謡だったものを、フラメンコに取り入れたもの。リズムは3拍子×4の12拍子で、最初の拍にアクセントがあるのが特徴。最も有名なのはウエルバ地方のファンダンゴ「ファンダンゴ・デ・ウエルバ」アクセントは ① 2 3 ④ 5 6 ⑦ 8 9 ⑩ ⑪ 12 である。



Fandangos de Huelva アントニオ フェルナンデス
Antonio Fernández

(8) マラゲーニャス Malagueñas (ミの施法)

マラガ地方のファンダンゴ、雄大な息の長い唄で出だしに特徴がある。

マラゲーニャスは唄の難易度が高く、フラメンコらしさを感じさせる曲。リズムは3拍子で3連符が特徴的。中南米で生まれ世界的に流行した「ラ・マラゲーニャ」（マラガの女）とは全く別である。



Malagueñas マリア アンヘレス マルティネス
María Ángeles Martínez
Malagueñas ピティンゴ
Pitingo

(9) タランタ Taranta (ミの施法 基音F#)

アンダルシア東部の街アルメリアで生まれ、鉦夫の嘆きの唄と言われる。自由なリズムで唄われるのがタランタ、同じ曲調で2拍子のタラント Taranto という形式もある。半音階のアラビア的な音の使い方に特徴があり、一度聴けばすぐにそれと判る。

Taranta パコ デ ル シ ア (ギター曲)
Paco de Lucia
Taranto ソラジャ クラビエーホ (バイレ)
Soraya Clavijo

(9) セビリアーナス Sevillanas (ミの施法, 長調, 短調)

セビジャーナスはフラメンコには属してはいないが、アンダルシアで最も流行し、優美で明るい大衆的な踊りとして親しまれている。ルンバと同じように、独自のジャンルで毎年新しい曲が創作されている。リズムは3拍子×2の6拍子。セビリアの春祭りはセビリアーナス一色に染まる

Sevillanas ラジャ レアル
Raya Real
Sevillanas マリア デル モンテ
María del Monte

フラメンコに熱をあげ、スペインから来日するアーティストの公演にはよく行った。

ギターの「ビクトル・モンヘ・セラニート」や「パコ・デ・ルシア」が来日した時は、右手、左手の動きが良く見えるように直近の席で観た。今はユーチューブの動画で演奏を見ることができるが、当時はレコードでしか聴くことができない演奏である。セラニートの弾くブレリアス“ヘレスの夜明け”

は、3連のラスゲアードを弾きながらゴルペを打つ超絶テクニックで、どのようにして弾いているんだろう？勿論自分にできるとは思っていないが、どんな手の動きなのか興味津々だった。

パコ・デ・ルシアは早熟の天才で、やはり超絶テクニックの持ち主。彼の演奏した「ルンバ」(Entre ^{エントレ} Dos Aguas/二筋の川) は当時新感覚の曲で、その後多くのアーティストに影響を与えた。その後半のパッセージは、とにかく速くて目が回るほど、どうしたらあのように超速で弾けるのだろうか？と不思議だった。パコはテクニックばかりでなく音楽性も素晴らしく、次々と魅力的な曲を発表した。

その後、彼の才能はフラメンコの枠から飛び出し、ジャズ系ミュージシャンと融合した「フュージョン」音楽の世界でも大活躍した。フラメンコは“即興”演奏が普通であり、ジャズと相通ずるところがある。彼は、スペイン最南部の港街アルヘシラスの生まれである。熱狂的なファンの私は、はるばる彼の生家を訪ねて行った。そんな憧れのパコだったが、2014年66歳の若さで急逝！したのが本当に惜まれる。

マリア・バルガスというカンタオーラ(女性の歌手)の唄う、Homenaje al Piyayo (ピジャージョ ^{オメナーヘアルピジャージョ} [人名]を讃えて) というタンゴス・デ・マラガ(マラガ地方のタンゴ)の歌詞を次のように訳してみた。ピジャージョの人格が伝わって来るとても好きな詩である。

エルピジャージョ エラ タン ブエノ
El Piyayo era tan bueno
タン ヒターノ イ タン カバル
tan gitano y tan cabal
ケ クアンド ス ビオ アル シ エロ
que cuando subió al cielo
ア ディオス レ キ ソ カンタール
a Dios le quiso cantar
ラ ペナ デ ロス モレーノス
la pena de los morenos

「ピジャージョ」はとても良い男だった
ヒターノの中のヒターノ、そしてとても正直者
彼が天国に上った時
唄で神様に伝えたかった
ヒターノたちの苦しみを
(モレーノス：褐色の肌の人=ヒターノ)

[Homenaje al Piyayo](#) ^{マリアバルガス} Maria Valgas

フラメンコの公演で、一つだけ特に忘れられない光景がある。

マリオ・マヤの日本公演での記憶。彼はヒターノの家系に生まれ、革新的なバイラオール(男性の踊り手)で多くの踊り手に影響を与えた第一人者である。公演の終盤、伴奏なしで静寂の中、一人で踊るシーンがあった。ステージの照明は消され、スポットライトだけが当てられている。踊りは終わりに近づき、クルッと一回転したその瞬間のこと。髪の毛から飛び散った汗が霧となり、スポットライトに照らされ虹となった。その時観た幻想的な情景が今でも忘れられない。

踊りと汗で思い出すのは、伝説的な踊り手カルメン・アマヤの逸話。幼いころから踊りに明け暮れた生活をしてきた。毎日、激しい踊りでたくさんの汗をかき、そのため腎臓が充分発育しなかったというのである。不要な水分や毒素を汗として出すことで、子供のような小さな腎臓でも生きていくことができた。発育不全の腎臓を抱えたカルメンは、50歳で亡くなるまで、踊ることによって生き延びようとしたというが、俄かに信じられないような話である。(2021.09.05)